

# ふるさとわがまちづくり

## 藤沢自治区

### ◆「藤沢」の由来

中心市街地から矢作川に沿ってさかのぼること18キロ余り、水と緑豊かな自然環境に囲まれた静かな山間の自治区です。

藤沢は県道豊田・明智線沿いと、松嶺町・押沢町に至る沢沿いに、家が点々と細長く軒を並べています。地名も、この沢に天然の藤が所狭しと咲き乱れていたところから、「藤の沢」、藤沢と付いたと言われています。

### ◆「藤沢」と矢作川

昔は、山とともに川もまた、日常の生活の中で無くてはならない存在でした。藤沢は、矢作川120キロメートル（30里）といわれる中間点、上流からも、下流からも60キロメートル（15里）の地点にあります。この付近には、河原あり、瀬あり、淵もあって、川のすべての条件を備えています。



これらの瀬には、ぞうしの瀬、小六の瀬、源治の瀬などの名が、また川の中の主な石には、千貫石、弁慶石、夕立石などそれぞれに名前がついています。なかでも、銚子の口といわれているところは、かつて筏の難所として知られていました。この銚子の口は、今は阿摺ダムの下にその片鱗がわずかに残っているだけですが、川一面の岩の中を幅5メートル、長さ100メートルほどに渡って、水が掘り抜き、川となっていたところ。銚子の口のようにこの部分だけが細く括れているところからこの名が付いたそうです。

### ◆藤沢のお祭り

筏下りは、昭和9年の矢作ダムが建設後も数年間は、筏がここを下っていました。筏は、上流の旭町方面から竹や木材を藤で縛り、船頭が乗り込んで下ってきました。

また、矢作川の材木運搬や渡船の安全を祈願する川の祭り“水神祭り”は、毎年お盆に行われていました。竹ふで皮が落ちる頃に行われる所から“ふで皮祭り”とも“万燈祭り”ともいわれていました。屋形船に提灯をいくつも吊るし、中で笛や太鼓のお囃子があり、それにつれて船は川を下ったり上ったりします。打ち上げ花火、金魚花火なども行われ、藤岡、小原、豊田方面からも多くの人が見学に来て賑わったものでした。

この祭りも、時代とともに形態が変わり、現在は、河原に屋形を組み立て、藤沢小学校の児童と保存会のメンバーで古より伝わるお囃子（水神囃子）を奏で、打ち上げ花火・金魚花火などを行い伝統文化の継続に努めておりますが、いつかは、船を川面に浮かべ古来の姿を復活させたいとの声も上がっています。



同じように、秋の大祭についても、火縄銃を打ち鳴らし馬2頭が練り歩き、猿投神社の分神を祭る神社の境内で、“鎌田流棒の手”の献納が多くの見物人の中で、華々しく行われていたのも昔の話となってしまいました。

### ◆まちづくり

変わる事のない自然環境の中で、現在の戸数は全盛期の半分近くとなり、また、明治、大正、昭和そして平成と、時代を担う多くの人材を輩出してきた地域の誇りとも言える藤沢小学校の存続も危ぶまれております。

こうした状況の中で多くの先輩の皆さん方が永きにわたり努力をされ、それぞれに貴重な歴史遺産を残して頂いております。今、まさに藤沢自治区の将来について、歴史の重みを感じつつ、安心・安全で安らぎのある、住んでいて楽しいまちづくりに、自治区民一丸となって、知恵と汗を出し合いながら取り組んでいく時期であると思っています。



### 藤沢自治区データ

(HZO.4現在)

世帯数：26世帯  
：37世帯（昭和52年）  
組数：4組  
面積：0.984K㎡  
自治区たより：「ふじさわ」  
回覧：月2回  
防犯灯設置箇所：15箇所  
小学校：藤沢小学校区  
自治区会館：藤沢町公会堂